



Title	私の保健婦活動：衛生教育への新しい試み
Author(s)	飯原, 洋子
Citation	大阪公衆衛生. 1980, 43, p. 20-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84037
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

私の保健婦活動

ー衛生教育への新しい試みー

大阪市西淀川保健所

飯 原 洋 子

保健婦活動の最も大切なもののひとつに、衛生教育がある。家庭訪問のように、こちら側から出向いて個別的に行なうものや、〇〇教室などのように、集団を対象として行なうものなど、様々な形態で展開されている。

当保健所において、集団を対象とした衛生教育といえば、『母親教室』『育児教室』『高血圧教室』といったような名称のもの、また、乳幼児健診時や、公害健康被害患者の手帳更新時などにも行なっている。これらの衛生教育は、所内ばかりでなく、老人センター、PTA、または企業からの要請にも応え、所外に出張することもある。

そういった指導を行なう中で、私なりに考えた事柄があった。それは、指導を受ける対象は、すべて“大人たち”であり、たとえ、子どもたちの健康の保持、増進あるいは健康回復を目的とした衛生教育であっても、やはり指導の対象は、この子どもたちの親である“大人たち”であった。

私は、これで良いのだろうか、子どもたちを対象とした衛生教育ができないものだろうか、それはどんな方法だろうか、というようなことを考えた。しかし、集中持続時間が5分間だ（これは強制された場合）といわれている子どもが対象の場合、どのように話せばいいのか。

そこで子どもたちに興味を持たせながら指導をする方法として考えたのは、人形劇というひとつの手段で、最初に試みたのは、就学前の幼児喘息教室においてだった。

いたずらのカッパと働きもののサルのお話

を作った。そのストーリーは、カッパにいたずらされた挙句、すもうを取って負けてしまったサルは、毎日カッパの好物の胡瓜を持って来るように命じられる。

1カ月後、胡瓜しか食べず弱ってきたカッパを見て、サルはすもうの再試合を申し込み、今度は勝ち、偏食を悟すというものである。“なんでも食べようよくかんで…”という、リズム感のある台詞を繰り返しているうち、子どもの方からも同じように口ずさんでいるのが聞えた。

二回目の試みは、つい最近の幼児喘息教室だった。

二匹の全く対照的な、喘息の小ブタと元気な小ブタ、そしてヤギのお医者さんとで、早寝早起きや乾布まさつ、体操の習慣をつくろうという内容で、保健婦だけでなく、他の係からの応援もあり、前回にも増して子どもたちの反応は大変なものであった。

やり方によっては、子どもを対象とした衛生教育も可能であると気付いた。もちろん、子どもの同伴の保護者もあわせて衛生教育するのは言うまでもない。まだ保健婦1年半の私ではあるが、先輩や仲間のアドバイスのもとに、これから、もっと楽しくて興味をもたせながら衛生教育できる人形劇を、幅広く考えて行きたいと思う。

